共同研究報告書

2023（令和5）年度　東北アジア研究センター共同研究報告書

提　出　2024(令和6)年4月20日

代表者　荒武 賢一朗

（本報告書はセンター内外への公開を原則とします）

研究題目	和文）　近世東北アジアの交流と情報 英文）　Interaction and intelligence of the Northeast Asian in the early modern			
研究期間	2023（令和5）年度　～　2025（令和7）年度（2年間）			
研究領域	(C) 移民・物流・文化交流の動態			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	荒武 賢一朗	東北アジア研究センター・教授	歴史学、日本史	研究代表者
	程 永超	東北アジア研究センター・准教授	歴史学、東アジア国際関係史	研究分担者
	麻生 伸一	琉球大学人文社会学部・教授	歴史学、琉球史	研究分担者
研究経費	学内資金	センター長裁量経費　［金額］　300,000円		
	外部資金（科研・民間等）		［小計］	
	合計金額	300,000円		
研究の目的と本年度の成果の概要 (600-800 字の間で専門家以外にも理解できるようまとめてください。)	東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門は、第3期計画（2022～2026年度）として「東北アジアの歴史資料学研究」を推進している。これは、東北地方を中心とした日本列島の歴史資料分析をふまえ、日本国内ならびに近隣諸国を含む東北アジア地域研究への積極的展開を目指すものである。 本課題では、17世紀から19世紀における日本・琉球・朝鮮・中国およびその近隣諸国を対象に、それぞれの歴史資料に関する性格を概観したうえで、国家外交から民間の人的交流までを諸階層に区分しながら、近世期の情報伝達および各国の管理システムについて詳しく考察を深めたい。この時期の特質は、中国における王朝交代や西洋諸国の進出があるなか、制限的な国交および貿易体制のもと、相互に近隣地域の情報収集に力を入れていたことにあろう。その一方、他国に対して「隠したい」案件も数多くあり、国家機密から生活文化に至るまで、競っての「探り合い」が顕著にみられた。 本年度は、対面の研究報告会および運営会議を2回開催（2023年9月於東北大学、2024年2月於沖縄県立芸術大学）し、初年度に完了したい基礎情報の共有や研究計画の具体化を実施することができた。また、オンライン形式の研究会を合計4回開催し、資料紹介や共通認識の促進を活発化させた。そのなかで、2023年度東北アジア研究センター外国人客員研究員として滞在したワシーリー・シェプキン氏（ロシア科学アカデミー東洋古典籍研究所主席研究員、歴史学・近世日露関係史）に助言とオブザーバー参加を乞い、ロシア極東地方も対象地域に加え、資料比較などを試みた。そして、個々の調査のほか、対面会議にあわせて東北大学附属図書館、琉球大学附属図書館などの所蔵資料を共同調査し、これまで視野に入れていなかった分野の情報も入手している。			
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	日本・中国・朝鮮半島に加え、ロシア極東地方に関する資料を研究対象に、広域的な人びとの交流や情報伝達の歴史を考察した。			
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など：6回		国際会議：0回	
	研究組織外参加者（都合）：22人		研究組織外参加者（都合）：0人	
研究成果	学会発表（0）本	論文数（0）本	図書（0）冊	

専門分野での意義	［専門分野名］ 歴史学	［内容］ 交流と情報を主題としたグローバル・ヒストリーとしての実証的成果
学際性の有無	［　無　］	参加した専門分野数：[1]　分野名称[歴史学]
文理連携性の有無	［　無　］	特筆事項：
社会還元性の有無	［　無　］	［内容］
国際連携	連携機関数：1	連携機関名：ロシア科学アカデミー東洋古典籍研究所
国内連携	連携機関数：2	連携機関名：琉球大学人文社会学部、沖縄県立芸術大学芸術文化研究所
学内連携	連携機関数：0	連携機関名：
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：0	参加学生・ポスドクの所属：
第三者による評価・受賞・報道など	なし	
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	今年度は資料収集と今後の展望を含めた議論に特化したため、具体的な成果を出していない。ただし、東北アジア研究センターがこれまで蓄積した研究成果を振り返り、とくに『ロシア史料にみる 18～19 世紀の日露関係』（全 5 集、東北アジア研究センター叢書）や、寺山恭輔編『開国以前の日露関係』（東北アジア研究シリーズ第 7 号、2006 年）をオンライン研究会でテキストとして活用し、現在に至るまでの東北アジア歴史研究の到達点を確認したことは大きな意義があった。各自で課題として分析を深めつつあるテーマは次のとおりである。 ・荒武「近世日本の漂流船と海外情報」 ・程「太平天国の乱をめぐる情報収集活動」 ・麻生「太平軍に関する情報と琉球」 　上記に加え、日本・琉球・中国・朝鮮の複数地域にまたがる事件・問題に関して既存資料からさまざまな情報を得た。とくに日本国内の資料所蔵機関のうち、国文学研究資料館・市立米沢図書館・東京大学史料編纂所などに関連文書があり、来年度はそれらの調査を進めたい。さらに、次年度から上述のワシーリー・シェプキン氏が研究分担者として参加予定で、日本とロシアの関係性を踏まえつつ、新たな歴史像を構築したい。	
最終年度	該当　［無］	

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

［学会発表］

［雑誌論文］

［その他］